

複合的資源管理型漁業促進対策事業 - トラフグ管理手法開発調査

中西尚文・藤田弘一

目的

平成9年度に策定されたトラフグ資源管理指針に基づき平成10,11年度の2カ年間漁業者検討会が開催され平成12年度に資源管理計画が作成された。この内容は資源管理指針の柱である10月の休漁について合意形成されず、不十分な計画となっている。その要因の一つに、地先での魚群の移動分布が明らかにされていない点があった。管理計画を実効性のある内容に見直すために、地先における魚群の分布移動等資源構造の把握及び問題点の解決を図る。

材料及び方法

1. 産卵生態調査

安乗漁協に所属するまき網(19トン型)1統の産卵親魚漁獲量及び漁獲された親魚の全長組成を調査した。

2. 漁獲物組成調査

伊勢湾口地区として石鏡漁協・安乗漁協・甲賀漁協、熊野灘南部地区として熊野漁協遊木浦支所にて延縄漁獲物の全長を測定した。

3. 漁場形成調査

安乗漁協の延縄漁業者3名に操業漁場位置、水深、銘柄別漁獲尾数を記帳依頼した。

4. 漁獲実態調査

県下14地区における延縄の漁獲日ごとの漁獲隻数、漁獲量・尾数、漁獲金額を調査した。

結果及び考察

1. 産卵生態調査

漁期は4月5日に始まり、5月28日に終了した。漁獲盛期は4月15日から4月30日までと考えられ、昨年よりも10日早かった。期間は約2週間と短く、総漁獲量は約1.96トンであり、漁獲尾数は1,311尾と推定され、平均魚体重は約1.6kgであった。雄は全長39cmにモードが見られ卓越年級群である2歳魚主体と考えられたが、密度効果のため例年よりも小さかった。

2. 漁獲物組成調査

伊勢湾口地区の延縄漁獲物の全長測定結果をそれぞれ

図1に示した。10月の漁獲物は全長37cmにモードを持つ1+才魚が大部分を占めた。このモードは例年並であり、平成11年生まれの卓越年級群が主漁獲物であった昨年同期より1~2cm大きかった。この傾向は遊木浦に水揚げされた熊野灘南部地区の漁獲物の全長測定結果でも同様であった。

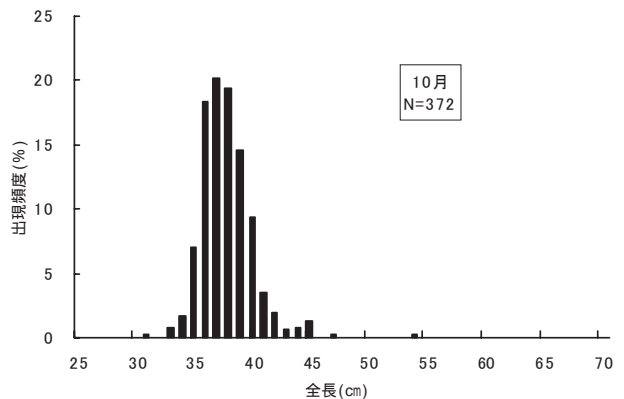


図1 伊勢湾口地区(石鏡・安乗・甲賀)における延縄漁獲物の全長組成

3. 漁場形成調査

10月は伊勢湾内で漁獲尾数が多く、CPUE(銘柄:中)も19.4と高かった。11月の漁場は特に東部渥美外海である愛知・静岡県境寄りが好漁であった。12月の漁場は完全に伊勢湾内から渥美外海に移ったが、好漁場は11月と同じ傾向であった。

4. 漁獲実態調査

延縄による漁獲量・漁獲金額の経年変化を図2に示す。平成13年度の総漁獲量は39.7トン、総漁獲金額は235百万円で、それぞれ対前年比47%、59%と前年を大きく下回った。過去15年間で漁獲量は5位であるが、漁獲金額は9位であり、平均単価の5,933円/kgは昨年の約1.3倍というものの14位である。

平成13年度漁期における旬別の漁獲の推移を図3に示す。10月中旬以降伊勢湾口地区の漁獲が増し、10月下旬に最も漁獲量があった。12月以降には急速に漁獲量が減少した。漁獲隻数(努力量)の推移を図4に示す。月別計では11月、10月、12月の順で隻数が多かった。1月以

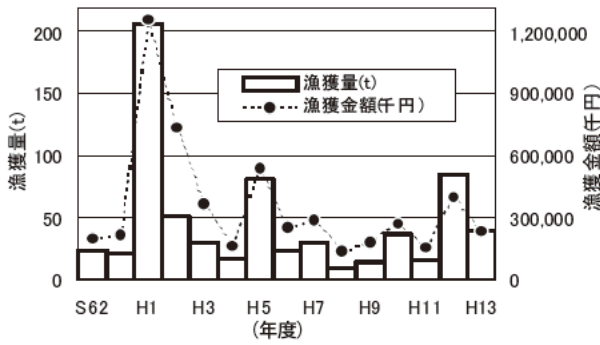


図2 漁獲量・金額の経年変化

降は伊勢湾口地区の漁獲隻数が激減し、隣の志摩南部地区が多く出漁している。志摩南部地区は11月下旬～12月上旬と2月の隻数が、熊野地区は10月が多い傾向であった。紀北地区は11月上旬～12月中旬の隻数が少ない傾向であった。冬季の伊勢湾口地区の漁獲隻数が減るのは、季節風などによる荒天のため、出漁日そのものが減少するからである。旬別の単価の推移を図5に示す。11月中旬までは低調であるが、11月下旬以降は高騰し地区によって差はあるものの、12月中旬～1月中旬に最高値を記録していた。過去15年の月別の単価比（10月を1とした場合）の推移を図6に示す。平成13年度は、12月の単価が10月の約2.5倍と大きく上昇し、1月以降の下降も緩やかな傾向を示した。昨年度は12月になってもそれほど上

昇しなかったため、今年度の漁模様が心配された。これは昨年ほど大漁でなかったために市場に余ることなく、本来消費の多い年末年始に多少は消費が促進されたためだと考える。

日毎における1隻当たりの漁獲量（CPUE）の模式図を図7に示す。伊勢湾口地区は小型船が多い愛知県と出漁日を取り決めて出漁しているため、概して県内の他地区より出漁日が少ない。図からは出漁日は少ないものの、出漁すれば1隻当たりの漁獲量は圧倒的に多いことが分かる。尾鷲地区以南は漁期当初に比較的多いが徐々に減少していく傾向がうかがえる。贄浦地区から尾鷲地区では1月末～2月当初にかけて比較的まとまった漁獲があった。この時期の島勝から尾鷲にかけては日が経つことに漁場が南下する傾向があった。日毎のCPUEの推移から、大きく地区を分類することができる。漁期当初ほど好漁で経時的に漁が悪くなる：伊勢湾口地区、盛漁期は11月以降で漁期末に好漁の場合がある：志摩南部地区～紀北地区、漁期当初は好漁であるが大きく減少せず少ない漁が続く：熊野地区、の3つである。

トラフグ資源管理指針は11月以降の価格の上昇を踏まえた加入あたり水揚げ金額の増大に特徴がある。志摩南部から熊野地区は地区内で自由に漁場行使しているのに対し、伊勢湾口地区は愛知県と共同で漁場を行使してい

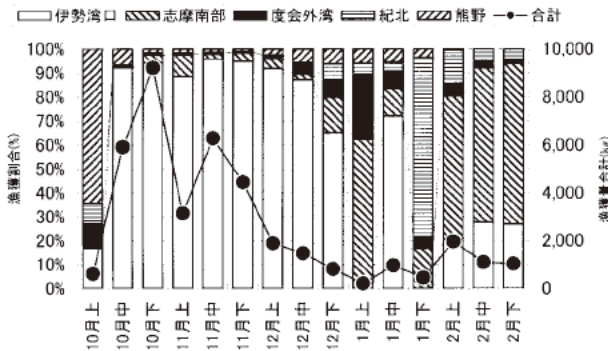


図3 漁獲量・割合の推移

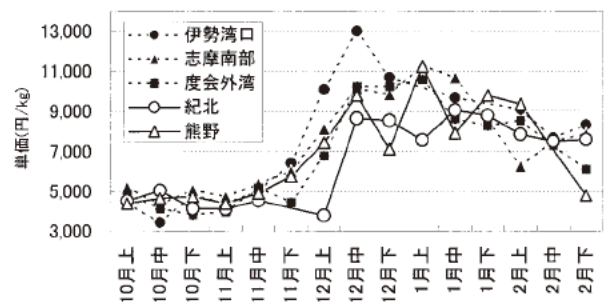


図5 単価の推移

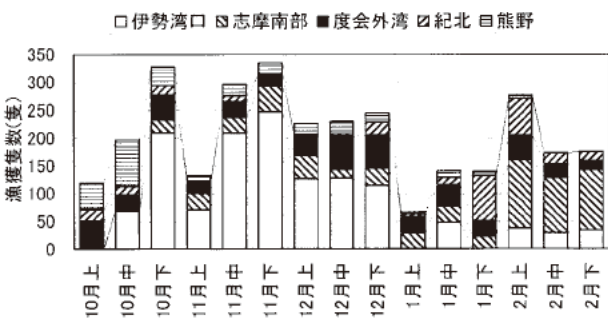


図4 漁獲隻数（努力量）の推移

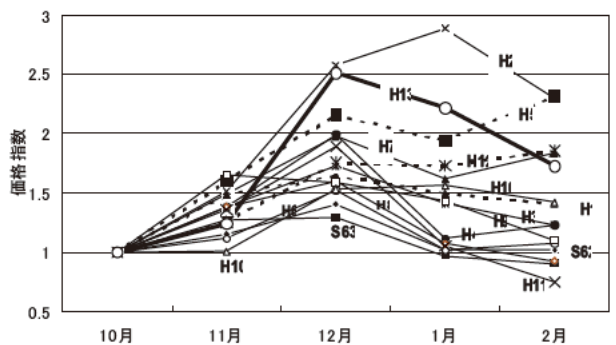


図6 月別の単価比

る。愛知県との共同行使に関して、出漁日の決定は愛知県側が有していると聞く。このため、伊勢湾口地区の漁業者には出漁日の増加を希望する声強いが自由に出漁できない現状がある。過去の標識放流調査や今漁期の日毎のCPUE推移から解禁の延長によって魚群が一散するとは考えにくい。漁期当初の単価や獲り残しを増やし高価な時に漁獲することを考えると、関係者の休漁に関する意見が一致しない現状にあっても、10月の努力量を

削減することは得策である。試行的に10日や2週間解禁を遅らせるなど段階的に模索する手法もある。東海3県のフグ延縄関係者は共通の資源を共同で利用する最適な資源管理のあり方をねばり強く検討する必要がある。

関連報文

三重県：平成13年度複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書

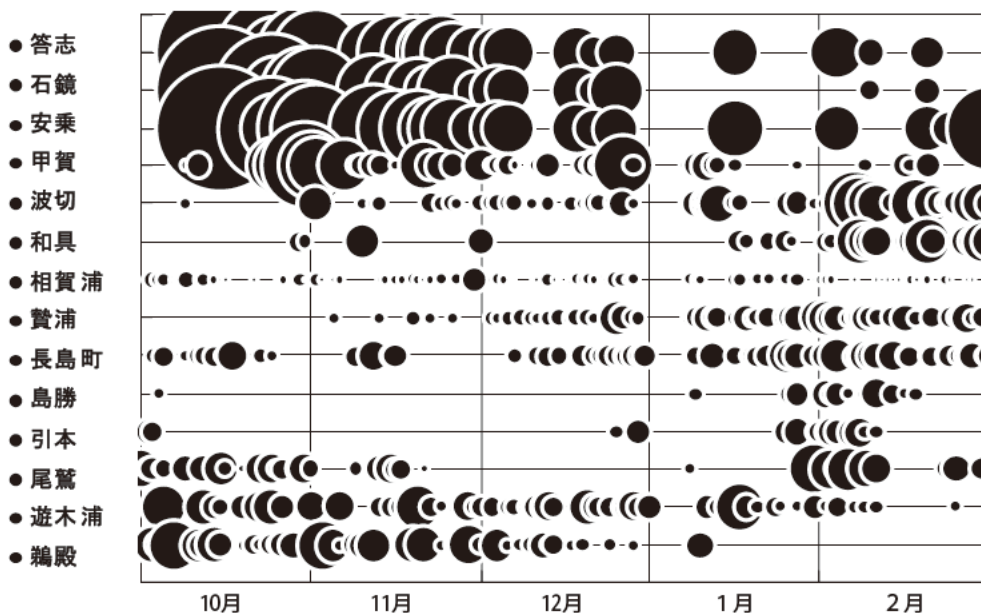


図7 1隻当たりの漁獲量（CPUE）の推移